

新潮文庫

歪んだ空白

森村誠一著



新潮社

ゆが 歪んだ空白 くう はく

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草 177 F

昭和五十三年八月二十五日 発行
昭和五十三年九月二十五日 二刷

著 者 森 村 誠 一

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二
振替東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社 製本・錦明印刷株式会社

© Seiichi Morimura 1978 Printed in Japan

新 潮 文 庫

歪 ん だ 空 白

森 村 誠 一 著



新 潮 社 版

2486

目次

歪んだ空白	七
殺人環状線	三
死海の廃船	一二
被殺の錯誤	一七
人間解体	一九
祖母為女の犯罪	二四

解説 風見潤

歪ゆが

ん

だ

空

白

歪んだ空白

1

女から初めてそれを告げられた時、男は目の前が暗くなるような絶望感をおぼえた。

これで何もかもだめになる。折角微笑^{ほほえ}みかけた運も、権力と地位への招待状も、ハイソサエテに至るエリート^イの資格もすべてが取り消される。

男は、その絶望をもたらしただ女の下腹を恐怖の目でみつめた。別にそこにはまだ徴候は認められないようだ。いつもと同じ妖^{あや}しいくびれと、たった今、男から思うさま貪^{むさほ}られた桜色のぬめりを帯びたふくらみが、無限のたくましさと貪欲^{どんよく}さをもつて、男を再度の導入に誘うように挑発的な曲線を描いている。

しかしそれを告げられた後の男には、いつものように二度目の欲望は湧^わいてこなかった。むしろそれを眺め、それに触れることが恐ろしくなってきた。

「墮^{おろ}してくれ！」

最初のショックからようやく立ち直った男は、女に頼んだ。

「おろす？」

女には最初その意味がわからなかったようである。

「何を言うの!?! 私たちの最初の子供じゃないの。私、あなたが喜んで下さるものとばかりおもっていたのに」

男の言葉の意味を正確に把^{つか}み取った女は、次の瞬間、悲鳴のような声をあげて男を詰^なった。

「そりやもちろん嬉しいよ。嬉しいけど、まだぼくらは正式に結婚もしていない。結婚もしないうちに子供ができちゃったらまずいよ。君だってウチの社風はわかるだろ。もともと社員同士の恋愛に消極的なうえに、上役たちにふしだらな男と思われたら、おたがいの将来にとってもマイナスなんだ」

男は女をなだめすかすように言った。

「すぐに結婚式を挙げればわからないわ。結婚してしまった後に子供が産れるんだったら、少しぐらい早くても、何でもないわよ。ねえ、今日これからすぐに私の父や母に会って！」

「君はぼくのことをもう両親に話してしまったのか!？」

男は唇まで白^{はく}くした。汗みどろだった二人の体は完全に乾いている。たった今、共通の目的のために激しく燃えた二つの軀^{からだ}は、骨まで冷えたように、冷え切っていた。

「あなたがいけないって言うから、まだ話してないわよ。でもどうして話してはいけない？」

「まっ、待ってくれ。もう少し待ってくれ」

「あなた」

女は急に目を据えた。中高の小さな可愛らしい唇に、その形にそぐわないふてくされたような笑いが浮ぶ。

「私と結婚する気なんか最初からなかったんでしょ。私、知ってるのよ」

「知ってるって、何を？」

男の口調に狼狽があった。

「隠してもだめ。藤本専務のお嬢さんとあなたとの間に縁談があるっていうことよ。東京本社ですら知られていない情報も、女には早く入るものなのよ。特にあなたに関するニュースは、誰よりも早く入るようにしているわ」

「そ、そんなことまだはつきり決ったわけじゃない」

男の狼狽を強めた言いわけがましい口調が、女の言葉の正しいことを裏書きしていた。

「あなたは私が邪魔になったのね。次期社長最有力候補の藤本専務の娘と結婚すれば、末の出世は目に見えている。支社の貧しいタイプピストなどは、それこそ月とすっぽんだわ。だから私とお胎の子供が居ては都合が悪いのよ。でもそんな勝手はさせないわよ。あなた、私の体を初めて求めた時、何と言ったか覚えてる？ 忘れてるんだったら、思い出させたげましょうか。きみはぼくにとってただひとりの女性だ、人間は誰でもこの世に生れた時にただひとりの異性をもっている、しかししたいいていの人間はそのような人にめぐり逢えないます、ナンバーツーや、ナンバースリーの相手にがまんしてしまふ、でもきみはぼくにとってただひとりの女性だ、ベストの女性だ……」

「たのむ、止めてくれ！」

「止めないわ。あなたはそれを自分の都合からあっさりと取り消してしまった。私ひとりのことだったら、それも許したかもしれない。でも生れてくる子供は、あなたの都合に関係ないわ。子供の命は親の都合、それもごく手前勝手な都合だけで処理できるもんじゃないわよ。私が絶対に

そんなことはさせないわ。私を捨てたければ捨ててもけっこう。でも私は子供を産むわ。誰の子でもない、正真正銘のあなたの子供を産んで、私が育てて上げる。もの心つくようになったら、お前の父親は、自分の出世のために、お前がまだお胎の中に居たころ殺そうとした冷酷な男なよと教えてやるわ」

女は憎悪にみちた目で男を見た。それはうちに圧縮された憎悪が、目に出口を見つけて迸り出てくるように、白い炎を噴き上げていた。

窓外にはようやく夜の更けた大都会が七彩の光を砕いている。巨大ホテルの厚い防壁によって、プライバシーを保証された密室の中で、一組の男女は、たがいの体を組み合わせるのに絶好の姿勢と状態にありながら、激しく憎み合っていたのである。

2

新大阪駅4番線新幹線到着ホームで若い女性の刺殺体が駅員によって発見されたのは、三月二十九日の午後一時半ごろである。折りしも到着したばかりのひかり27号の乗客が三々五々と散って行った後の、ホームのはずれにある一人掛けのベンチにうずくまったまま、いつまでたっても動かない若い女性が居るのに気がついた駅員は、乗客の一人が気分が悪くなったのかと思って声をかけた。

しかし返事はかえってこなかった。

「もしもし……」

声を大きくしかけた駅員の目は、彼女の足もとにどろんとかたまっているかなりの量の赤黒い粘液にふと吸いつけられた。愕然^{がくぜん}としてあげた彼の目は、粘液が滴下したあとを溯^{さかのぼ}る形になって、その源になっている胸のあたりに釘^{くぎ}づけになった。

「こ、ここ」

変死体を初めて目撃、発見した彼は、殺されていると言ったつもりが、言葉にならずに、上司や同僚のつめている駅の事務室の方へ一目散に走った。

*

死者の身もとはハンドバッグの中にあつた通勤定期券から、西宮市甲子園口二の二四六中城^{ちゅうじょう}泰子^{やすこ}と判明した。中之島にある東日商事大阪支社に勤める二十三歳の未婚のタイピストで、両親といっしょに住んでいる。家人の話によると、その日は友達といっしょにビジネス博^{フェア}を見物に行くのだといって、十一時ごろにはしゃいで出て行ったそうである。

創傷は左胸部にただ一カ所、鋭利な刃物で心臓部を一突きにされていた。犯人は被害者とベンチに並んで腰かけながら、隙をみて隠しもっていた凶器を被害者の内臓の奥へ叩きこんだのであろう。

被害者が坐っていたベンチは、それぞれが一人掛けのセパレートスタイルである。脚部が五人用ワンセットに連結されているもので、中城泰子はその中央に腰をおろしていた。

犯人が右利きにしても左利きにしても、被害者のすぐ隣りに坐って、何か雑談でもしているような形で、隙をみて襲えば、ホームの人目をごまかせる。返り血も最小限に防げるだろう。

傷口と血液の凝固状態からみて、事件が発生してからまだいくらも時間が経っていないことがわかった。凶器は犯人が持ち去ったらしい。現場および周辺をいくら綿密に検索しても発見できなかった。

鑑識が応急に推定した被害者の死後経過時間は約一時間である。4番線ホームの列車到着状態とにらみ合わせると、ひかり23号の到着直後すなわち午後一時ごろに凶行が行われた疑いが最も強かった。

ひかり23号は十二時五十分、定刻通り4番ホームへ到着した。降り立った乗客は五分もすれば、それぞれの方角へ向って散ってしまふ。列車到着後のホームの外れのベンチは、時間的にも場所的にも盲点であろう。(六四ページ、時刻表①参照)

4番ホームはひかり23号が着くと、同25号が入って来る十三時十分まで二十分の間隔がある。この間に犯人は悠々と逃走できる。

「もしかすると犯人はひかり23号に乗って来たんじゃないかな?」

駅からの急報によって駆けつけた大阪府警本部捜一の老練刑事、水田が呟いた。ずんぐりした体軀の、いかにも精悍な面がまえである。しかしこのところ少々血圧が高目で、血圧降下剤をひそかに服んでいることは誰も知らない。

「すると被害者は犯人を出迎えに来たんでしょうか?」

水田のよい相棒である若手の安原刑事が言った。これはまた水田とは対照的に背が高く、色白の美男子である。

「うん」と水田は大きくうなずいて、

「殺そうと思っている女をホームに呼び出しておいで、列車から降りたつと、やあやあとか言いながらしばらくベンチで懷かしそうに話しこむ。乗客や駅員の姿が居なくなつたところでえいやつとばかり刺し殺してしまつた。被害者を駅へ出迎えさせれば、犯人は最も自然に接触できるからな」

話している間に二人の刑事は、その推測が次第に確信に固まってくるのを感じた。

その推測にもとづいて聞き込みを重ねたところ、当時4番ホームで働いていた数人の駅員から、凶行時間帯に被害者の坐っているベンチの方へ歩いて行つた者のないことが確かめられた。そのベンチはホームの外れにあり、そこへ近づくためにはかなりの距離をホームの上を歩かなければならない。到着列車から降りた乗客の人混みに紛れこもうとしても、人の流れに逆らつて歩く形となるので、ホームに何人かいた駅員の目をくまますのは不可能であるとわかつた。

となると、犯人は死亡推定時間から判断してひかり23号に乗ってくる以外に被害者に接触できなかったことになる。

水田刑事の推測は第三者によつてうらづけられたのである。

解剖の結果は、それをさらに補強するものだった。死体が新しかつたので、死亡推定時間は十三時ごろとさらに厳密に割り出されたからである。十三時十分にはひかり25号が同ホームに到着するが、犯人がこれに乗ってくると死亡推定時間に遅れてしまう。死因は心臓部の損傷に伴い、心嚢内しんのうに出血したために生じた「心嚢タンポナーデ」によるものである。ホームのコンクリート

上に流下した血液は、少量でも凄惨せいさんに見えるもので、大した出血ではないこともわかった。

第一衝撃によって心臓がその働きを止めてしまっているので、出血は少なかったのだ。

水田刑事が推測したように、被害者の隣りに腰かけて凶器をふるったとすれば、犯人はほとんど返り血を浴びていないことも考えられる。

三十日、所轄署に開設された捜査本部をさらに興奮させたことは、被害者が妊娠四カ月に入っていた体であった事実である。被害者は未婚である。誰しも胎児の父親を犯人に結びつけた。

被害者の血液型はA型である。胎児はAB型だったので、その父親はB型かAB型でなければならない。

発見者の駅員および、当日周辺で勤務していた職員などにさらに綿密な聞き込みがかけられたが、初期捜査以上の収穫はなかった。考えてみれば、ホームのベンチに人待ち顔に坐っている女と、ホームを人波と共に歩く旅装の男（と確定したわけではないが、その推測は胎児のセンからかなり強い）は、駅頭のごくあたりまえの情景で、何ら人目を惹く要素をもたない。

現場周辺の聞き込みを諦あきらめた捜査官は、被害者の身辺に捜査の足をのばした。

捜査本部では、当然のことながらまず被害者の生前の男関係を洗った。特にB型またはAB型の血液をもつ男の割出しに初動捜査の焦点が絞られた。

3

しかしこの捜査は、はかばかしく進まなかった。被害者の周辺に男関係が浮び上がらないので